

第9回リニア中央新幹線静岡工区モニタリング会議

○ 静岡県中央新幹線環境保全連絡会議専門部会での対話状況

第22回地質構造・水資源部会専門部会	(令和7年10月29日)
第23回地質構造・水資源部会専門部会	(令和8年2月4日)
第18回生物多様性部会専門部会	(令和7年11月5日)
第19回生物多様性部会専門部会	(令和8年1月21日)

令和8年2月18日

静岡県

第22・23回地質構造・水資源部会専門部会での対話の内容

※赤字は本日説明する項目

1 要対策土の処理【対話項目(5)】

- ・自然由来の重金属等を含む要対策土について、JR東海が検討したオンサイト処理に必要な設備及び立地等を含む具体的な計画について内容を確認する。

2 藤島発生土置き場【対話項目(1)・(2)】

- ・委員からの要請・意見を踏まえ、第17回専門部会で了解された発生土置き場立地の選定経緯を再確認する。
- ・藤島発生土置き場における盛土の生活環境保全措置について、JR東海が委員意見を踏まえて再検討した内容や、設計に関するより具体的な説明について内容を確認する。
- ・JR東海が検討したモニタリング計画等について内容を確認する。

3 リスク管理の手法とリスク対策【対話項目(3)】

- ・要対策土の処理方法として示されたオンサイト処理及び封じ込め処理について、リスクマトリクス・リスクマップを用いたリスク分析等の考え方について確認する。

1 要対策土の処理

対話項目1(5) 自然由来の重金属等を含む要対策土の処理
対話項目1(2) 全ての発生土置き場についての詳細な計画

【今回の対話】

- 自然由来の重金属等を含む要対策土について、JR東海が検討したオンサイト処理に必要な設備及び立地等を含む具体的な計画について内容を確認する。

【対話の結果】

- 発生が予測される重金属(ヒ素、フッ素、セレン)について、「乾式磁力選別処理」によりオンサイト処理する方針が示され、適切な工法であること、浄化処理後に発生する濃縮土は域外搬出すること、浄化処理できない酸性土は藤島発生土置き場に封じ込めを行うことを確認した。
- 藤島発生土置き場における封じ込め処理の手法として、「二重遮水シート」に加え、「ベントナイトシート」を敷設する計画が示され、科学的に最適である事を確認した。
- オンサイト処理施設の設置及び管理について、汚染土壌処理業の許可を得て、土壌汚染対策法の基準に則り行うことを確認した。

⇒対話項目1(5)について、対話完了

第18・19回生物多様性部会専門部会での対話の内容(1/2)

※赤字は本日説明する項目

1 沢の上流域調査【対話項目1(2)・(3)・(4)】

- ・ 秋季に実施した上流域調査の結果を確認するとともに、調査結果に基づき、重要種を確定し、指標種を選定する。

2 生物への影響評価【対話項目1(1)】

- ・ 上流域調査の結果を踏まえた、沢の生息場等に対応する生物のリストを確認する。
- ・ 沢の生息場等の変化の予測結果と生物リスト等から、生物への影響予測を確認する。

3 回避・低減措置【対話項目3(1)】

- ・ 薬液注入の事例や薬液注入以外の工法等を確認する。
- ・ 薬剤が流出するリスクと流出した場合の自然環境への影響、リスク対応の具体的な対策等、薬液注入の検討結果を確認する。

第18・19回生物多様性部会専門部会での対話の内容(2/2)

※赤字は本日説明する項目

4 大井川本流の流量及び水質・水温変化【対話項目3(2)、対話項目5(2)・(3)】

- ・椹島より上流(本流河川)の流量減少に対する具体的な保全措置として、薬液注入の詳細(施工方法や経年変化等)、生物への影響予測、モニタリング計画を確認する
- ・放流時のトンネル湧水温を確認し、放流後の河川水温と、生物への影響の予測結果を確認する
- ・管理基準値の検討結果と低減措置を確認し、水温に関するリスク管理における具体的な対応、及びモニタリング計画を確認する。

5 高標高部の湧水と地下水のつながり【対話項目4(1)】

- ・千枚小屋南側の湧水の供給経路について、JR東海が実施した調査による分析結果を確認する。

6 順応的管理のシナリオ【対話項目2(6)】

- ・現時点の全体構成案と具体的な行動計画案及び管理フロー案を確認する。

3 回避・低減措置

対話項目3(1) 薬液注入による自然環境への影響の把握方法、具体的なリスク管理

【今回の対話】

- 薬液注入の事例や薬液注入以外の工法等を確認する。
- 薬剤が流出するリスクと流出した場合の自然環境への影響、リスク対応の具体的な対策についての検討結果を確認する。

【対話の結果】

- JR東海から、使用する予定の薬液が未反応のまま地盤中に存在することはないとされていることや、万が一流出する可能性を考慮した水質管理等について説明があった。
- 専門部会として、トンネル湧水の低減対策は薬液注入が最適であること、薬液の河川等への流出の可能性は極めて小さいこと等を確認した。

⇒対話項目3(1)について、対話完了

<薬液注入のイメージ>

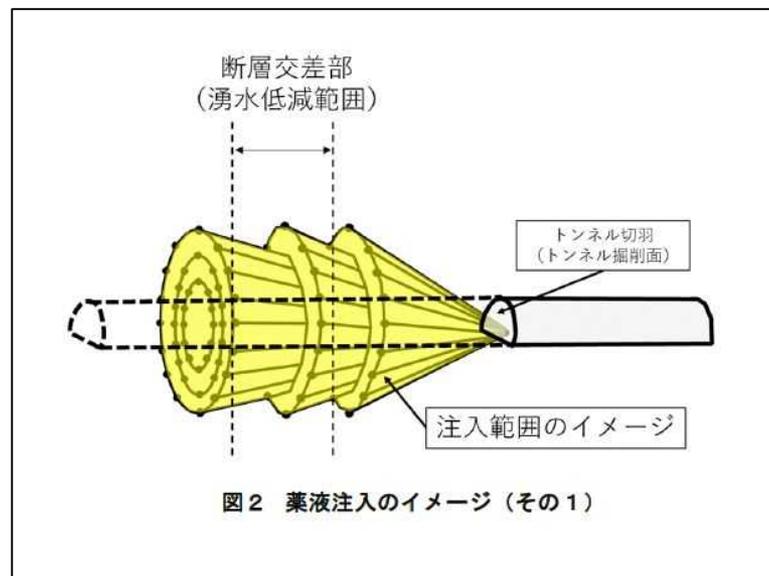


図2 薬液注入のイメージ (その1)

<出典> 第18回生物多様性専門部会 JR東海説明資料

4 大井川本流の流量及び水質・水温変化

対話項目3(2) 榎島より上流(本流河川)の流量減少に対する具体的な保全措置、
モニタリング計画

対話項目5(2) 水温について、生物への影響が懸念されない、安全な管理基準値の設定

【今回の対話】

- 薬液注入の詳細(施工方法や経年変化等)、生物への影響予測、モニタリング計画を確認する
- 放流時のトンネル湧水温を確認し、放流後の河川水温と、生物への影響の予測結果を確認する。

【対話の結果】

- JR東海が示した榎島より上流(本流河川)の流量減少に伴う生物への影響の予測結果や、モニタリング計画及び生物への影響が見込まれる場合の追加措置が妥当であることを確認した。
⇒対話項目3(2)について、対話完了
- 現況河川の水温を目標として低減措置を実施すること、管理値を設定し薬液注入の効果を確認すること等を確認した。
⇒対話項目5(2)について、対話完了